



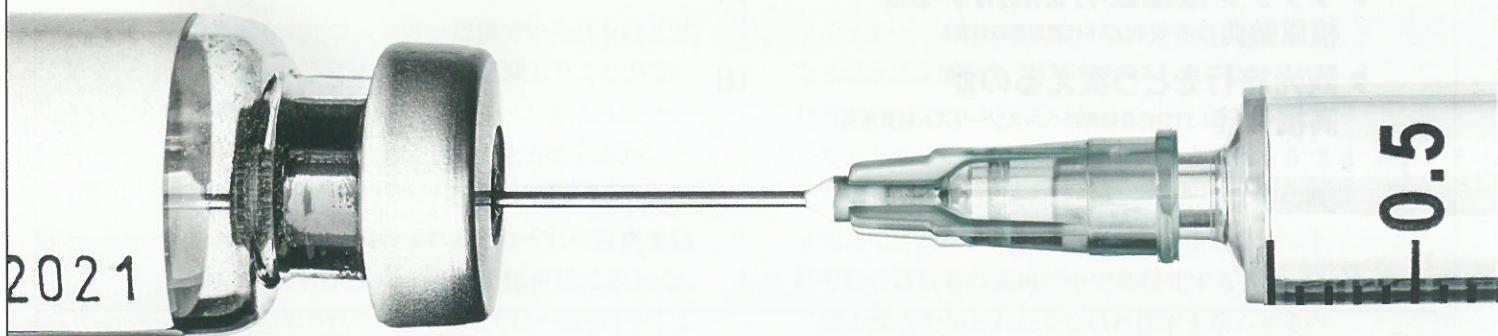
TRAVEL JOURNAL

Japan's No.1 Travel & Tourism Business Magazine
観光立国を支えるすべての人々に向けて

2021
4/5

ワクチンと ツーリズム

ゲームチェンジャーへの期待と課題



2021

■ 論文

日常生活支援の
担い手としての
大学生の可能性 後編

上野山裕士

(損保ジャパン日本興亜大学教務部教育イノベーションセンター講師)

■ 誌上セミナー

中国人客の購買パワー獲得術
次の糸口は音楽

新連載

旅するファッショントリップ
玉置美智子
(作家・ジャーナリスト)

好評連載

視座

神田達哉

(サービス連合情報総研業務執行理事・事務局長)

デスティネーションマーケティングの
現場から
村木智裕
(インセオリー代表取締役)

注射器 ゲームチェンジャーへの期待と課題

Theme
1

高齢者市場は すぐに動くのか

篠塚恭一 SPIあ・える俱楽部代表取締役社長

新型コロナウイルスの変異種が広がる英國では、昨年暮れから始まったワクチン接種により「安全」に対する自信を得た中高年層が夏以降の旅行予約に殺到したという。一方、米国やキューバなど外国へ接種を受けに行くためのワクチンツアーが富裕層に人気で、英國ではドバイ観光と滞在中2度の接種を受けられるツアーが5万ユーロで販売されている。アラブ首長国連邦（UAE）へのワクチンツアーは米国やインドでも企画され、イスラエルやバーレーンも医療観光地となっている。また、米国フロリダ州は受け入れ側の1つでカナダ、メキシコ、ブラジルから多くの人が訪れている。

コロナ禍による新たな医療ツーリズムは貧富の差が命の格差になりかねないと倫理的な批判もあるが、生き残れるか瀬戸際の旅行業界にあって1000億ユーロともいわれる市場は魅力的で、人気の観光地と絡めたワクチンツアーは増加傾向にある。

日本でも医療従事者に次いでワクチンが優先接種される高齢者層は旅行需要への回復期待が大きい。そこで、コロナ禍前まで旅行していた55歳以上の人を対象に「ワクチン接種をきっかけに旅行を再開するか」という独自調査を行ったところ261件の回答を得た。調査はインターネットと関係者を介して個別ヒアリングにより当事者の声を直接拾った。選択肢は接種後、「すぐにでも行く」「とりあえず予約する」「しばらく様子を見てから行く」「もう行かない」の4段階とした。

結果は「すぐにでも行く」と答えた人が29.6%、

「とりあえず予約する」は12.4%、「しばらく様子を見てから行く」が56.6%で半数以上となった。「もう行かない」と答えた人も1.4%あり、コロナ禍で旅行離れした人もいた。これを65歳以上（113件）に絞ると「すぐにでも行く」23.9%、「とりあえず予約する」9.7%、「しばらく様子を見てから行く」62.8%となり、高齢になるほど行動が慎重になっていくことがわかった。

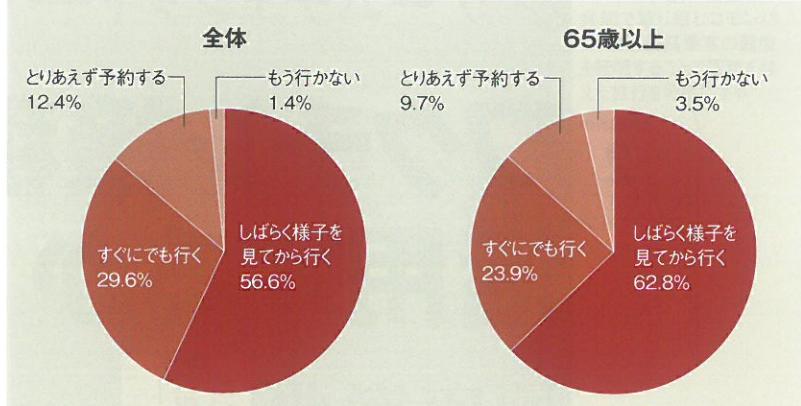
また「すぐにでも行く」と答えた人のうち71.8%は55～64歳で、65～74歳が19.2%、75歳以上は9.0%にとどまり、ワクチン接種と年齢による旅行需要の相関が見られた。

交流失い強いストレス

理由については自分のために行くタイプと社会のためにに行くタイプに分かれ、一部に「旅行消費で経済を回すことは大事だから」というエシカル消費もあった。自分のために行く人は「長い自粛生活を強いられ他の病気になりそう」「体調不良になった心身を癒やしたい」「たまつたストレスを発散させたい」「仕事に疲れたので自分へのご褒美にしたい」などの理由があった。さらに65～74歳は「あと何年自由に動けるかわからない」「先が短いことに気づいた」という人や75歳以上には「先の命がない」という切実な声もあった。

「しばらく様子を見てから行く」という人は「旅行はしたいが周囲に迷惑をかけたくない」と家族や

●ワクチン接種後の旅行動向



※インターネットとヒアリングでワクチン接種をきっかけに旅行再開の意向を聞いた(55歳以上、261人回答)

医療従事者等への気遣いを理由に挙げている。ワクチンについて多かったのは「副反応が心配」「変異種への効き目も確認したい」という疑念や恐怖感から来る不安だった。

自分が医療や介護福祉の現場で働いているからは、職業上の理由で「社会が落ち着くまで先に延ばす」という声も寄せられた。他にも「世間体が気になる」「接種待ちの人に申し訳ない」と他者を労う声もあり、「自分だけ接種するのではなく世界的に落ち着いてから出たい」という意見もあった。いずれも前提に「安全であれば」という条件の付く人は多く、家族に高齢者や疾患をもつ人もいるなど自己責任で不安は解消されず、旅行をためらっていることがうかがわれた。

「とりあえず予約はする」という人には、心から楽しめるのかという不安を残しつつも「この1年の心の疲れを癒やしたい」「子供に勧められた」のほか、「予約だけして楽しみを待ちたい」「不安があると自分も周囲も楽しめない。感染拡大すればキャンセルすることを前提に希望を込めた予約をしたい」「行きたいところはたくさんあるが、この環境下で自分の健康を考えると、とりあえず」という冷静な意見が旅のベテランに多くみられた。

ちなみに「もう行かない」と答えた人は75歳以上の男女で、「もう十分旅行は楽しんだ」と「当面は自宅で静かに過ごしたい」という理由だった。また、他の回答をした人の中にも「以前より旅行への意欲が低下した」という声があった。

あくまで参考レベルの意識調査だが、感染が流行している地域との移動は1年以上制限されており、帰省さえ不要不急とされ、人の交流を失ったことで強いストレスを抱えている人が多い。

冷静を取り戻すきっかけ

政府はワクチン接種による集団免疫をつくり国民の7割に免疫をもたせて感染を収めようとしている。オーストラリアのような厳しい国境封鎖をしてこなかったのは夏に予定されるオリパラの存在が大きいのだろう。首都圏では緊急事態宣言が再延長となり、

外出自粛の呼びかけと医療現場の窮状が繰り返し報じられるたびに旅行関係者のため息が聞こえる。メディアは次々に見つかる変異種に不安を煽り医療崩壊と脅すが、この1年で国民の感染症に対する知識は増え、予防の理解と感染拡大を防止する行動は浸透してきた。

3月中旬の国内感染者数はおよそ44.5万人、死者は8万5000人を超えた。一方、42万人以上がコロナから回復しているが、そうした話は注意しないと知らされない。インフルエンザは例年およそ1000万人かかり、約1万人が慢性疾患を悪化させるなどして死亡(超過死亡)している。日本はさまざまな疾患で毎年140万人が亡くなっていく多死社会を迎えていた。

得体の知れないウイルス、社会的感染症にまるで生命感を否定されたと感じる人がいる。これほど苦しい思いをしたことはないという人も少なくない。調査では高齢者の3分の1はすぐに行く、または予約するという意思を示し、55歳以上を入れると4割の人に動き出す可能性がある。流れを変える大きな存在だと思う。旅は健康と強い結びつきがあり生きる時間を意味あるものにするために不可欠なこともわかった。接種がいつになるかわからない介護従事者が「当たり前のことを当たり前に日々注意して接していく」と言っていたのが印象的だ。

多くの人がもはやコロナ前に戻らないと覚悟している。政府には水際対策含め感染者のコントロールを徹底してほしい。旅行者には新しい旅行様式を受け入れてもらい、ワクチン接種が正しく怖れる冷静さを取り戻すきっかけになればいい。



Profile

しのづか・きょういち
1991年にSPIを設立し現職就任。観光人材の育成・派遣に携わる。95年トラベルヘルパー(外出支援専門員)の養成開始。「あ・える俱楽部」の介護旅行事業に取り組む。2006年NPO法人日本トラベルヘルパー協会を設立し理事長に就く。